推し恋！②

～ときめき加速!?　恋と友情の運動会！～

ミズメ・作

ごろー＊・絵

アルファポリスきずな文庫

もくじ

第一章　運動会の練習が始まる　006
第二章　秘密の特訓スタート！　025
第三章　手紙　043
第四章　ひなの様子がおかしい!?　054
第五章　あたたかさに包まれる　068
第六章　笑っているほうがいい!?　089
第七章　変わりたい！　110
第八章　犯人さがしと結愛ちゃん　128
第九章　いよいよ、同居期間は終わり　151
第十章　ドキドキの運動会！　159
第十一章　ブラストのみんなとお疲れさま会！　170
第十二章　大きな一歩　189

登場人物紹介

胡桃沢千明

小5

ひなのクラスメイト。人懐っこく明るい性格で、学校のモテ男子。
かわいい&美のカリスマ、**momo**。
メンバーカラーはピンク。

鐘ヶ江朱人

中2

紫音のクラスメイト。筋トレが大好きな運動神経バツグンの圧倒的スター。
『ブラスト』のリーダー、**アカネっち**。メンバーカラーは赤。

鷹取深緑

小6

ひなが所属する園芸委員会の委員長。頭が良く、特に植物や動物のことに詳しい。
秀才インテリ、**ミドリ**。メンバーカラーは緑。

市山ひな

小5

大人気動画配信グループ『**ブラスト**』の大ファンで一番の推しは、アオ。
クラスのみんなよりも頭ひとつぶん身長が高いことが最近の悩み。かわいいもの好きだが、似合わなくなってしまったと思い今は封印中。

志水蒼太

小5

ひなの幼なじみ。近寄りがたい雰囲気があるが、実はとってもやさしいクール男子。
天才ゲーマー、**アオ**。メンバーカラーは青。

志水紫音

中2

蒼太のお兄ちゃん。何をしてもかっこいいキラキラ王子様系で、ひなのことを妹のようにかわいがっている。
グループ1のイケボ、**シオン**。
メンバーカラーは紫。

羽田結愛

小5

ひながひそかに憧れるクラスメイト。
おしゃれでかわいいファッションリーダー。

第一章　運動会の練習が始まる

「どうしよう……！」

よく晴れた五月の昼下がり。

わたし、市山ひなは頭を抱えていた。

五年生になってからの最初の三週間はあっという間に過ぎた。

もう本当に、事件ばっかりだったんだ！

身体測定で身長が百六十センチになったことに落ち込んでいたら、遠くで働くお父さんが大けがをして、お母さんがそっちに行くことになっちゃったの。

だから、お隣の蒼太くんのおうちに預けられて、一緒に暮らすことに！

同じクラスの蒼太くんとは幼稚園からずっと一緒だったけど、最近は話すこともなく

なっていたから本当にびっくり。

蒼太くんも、そのお兄ちゃんの紫音くんも超がつくイケメンで、わたしには毎日刺激が強すぎるよ〜〜！

しかも、なんとふたりは人気動画配信グループ『ブラスト』のメンバーだってこともわかっちゃったの。

リーダーのカネちさんに、園芸委員の鷹取くん、それからクラスメイトの千明くん。

『ブラスト』のほかのメンバーたちとも知り合いになっちゃって、もう本当にびっくりすぎる毎日だったんだ。

ちょっとずつ、みんなと仲良くなれてる気がして楽しい。

お父さんのことはすっごく心配だけど、お母さんから送られてきた写真はいつもの笑顔だからホッとしたんだ。足は包帯でぐるぐる巻きだったけどね……

今、わたしの頭を悩ませているのは全然別の問題なの。

——どうしよう。ダンス、苦手すぎるよ〜!!

わたしは心の中でそう叫んだ。

今月の第四土曜日に行われる運動会に向けて、体育の授業でついに準備が始まった。
徒競走も苦手だけど、わたしにとって一番の問題は、みんなで一緒に踊るダンス……！
背が高いから余計に目立っちゃう気がして、手足の動きが縮こまってしまって……はずかしくてうまく踊れなくなっちゃう。
「じゃあみんな、今日やったダンスは来週までに家で練習してきてください。動画配信もされてますので～」
授業の最後に先生がそう言うと、わたしも「は～い……」とみんなに合わせて小さく返事をした。

でも、気が重かった。
五時間目のグループワークの時間になってもダンスのことで頭がいっぱい。
今日はこの授業が終わったら、委員会活動もある。
「はあ……」
ため息をつきながら顔を上げると、同じグループの三人――結愛ちゃんと蒼太くんと千明くんがわたしを見ていた。
「ひなっち、どうしたの。そんなおっきいため息ついたら、幸せが逃げちゃうよお？」
結愛ちゃんがそう言うと、わたしは顔が真っ赤になった。
完全に無意識だったよ……！
大きなため息を聞かれちゃったなんてはずかしすぎる。
ちらっと前を見ると、蒼太くんと千明くんもこっちを見ていた。
「どうかしたのかな？　ひなちゃん」
「どうしたんだよ、ひな」

千明くんと蒼太くんがわたしの名前を呼んだ。
蒼太くんが「ひな」と呼んだとき、周りの空気がざわっとなった気がしたけど、今はグループのみんなに説明するのが先。
「ため息ついてごめんね。あの……体育のときにダンスがうまくできなくて、ちょっと落ち込んでただけなの。本当に全然気にしないで！」
あわててそう言って、わたしは資料を読み始めた。
防災についての学習なんだから、ちゃんと集中しないと！
「ダンスで悩んでるんだね。ひなちゃん、ぼくでよかったら教えようか？」
にこにこした笑顔の千明くんが、自分を指さしながらそう言った。
その笑顔は、まるで太陽みたいにまぶしくて、わたしは思わず目を細めてしまう。
「えっ……でも千明くんは、もうダンス全部覚えたの？」
「うん。ぼく、ダンスは得意なんだよね」
だって今日教えてもらったばっかりだよ？
わたしは正直、もうはじめから振り付けを思い出せないレベルなんだけど……

「そうなんだ。千明くんは歌だけじゃなくて、ダンスも上手なんだね」
わたしは感心しながら言った。
千明くんの正体は『ブラスト』のｍｏｍｏで歌がとてもうまい。
にこにこしていた千明くんは、口の前に人差し指をたてて「シー」のポーズをする。
――あっ！　みんなの正体はもちろん内緒。それなのに、わたし今「歌」の話をしちゃってた……！
あわてて口を押さえたけど、周りにそのことを気にしていそうな人はいない。
ほっと息をつく。あぶないあぶない。
「えっ！　それなら結愛にもダンス教えてほしいなぁ！　結愛も、ダンスでわかんないところがあってねぇ」
机から身を乗り出すようにして、結愛ちゃんが千明くんに訴えている。
「もちろんいいよ。ダンスなら任せて。ひなちゃんと結愛ちゃんと……蒼太も一緒に練習しようね」
千明くんがそう言ったところで、クラスの空気がまたざわめいた。

「え！　千明くん、わたしたちにも教えてよ!!」
「千明くん、こっちもお願い！」
「えーっ、わたしたちも教わりたいんだけど！」
「蒼太くんもいるなんて最高すぎ！」
いつから聞いていたのか、ほかの班の女の子たちも一斉に話しかけてきた。
もしかしたら、話しかけるタイミングをずっと待ってたのかも。
席を立って集まってきて、わたしはどうしたらいいかわからなくなっちゃった。
「こら、何してるんだ。席に着きなさい！」
「わ！　戻ろ戻ろ〜！」
先生が叱ると、女の子たちはキャッキャと席に戻っていった。
す、すごい勢いだった……！
千明くんと蒼太くんのこと、みんなよく見てるんだ。
そう思うと、心の中がチリッと痛くなるような感覚があった。
「……？」

なんだろう。心臓が痛い……のかな？
よくわからずにいると、蒼太くんは呆れた顔で千明くんを見ている。
「どうするんだよ、千明」
「はは。みんなかわいいね。ダンスがんばりたいんだねぇ」
のほほんとした千明くんは、周りの女の子たちの熱気をまったく気にしていない様子。
そして、どこか女の子たちへのやさしさも感じられた。さすがは王子様だ。
でも、みんなが参加するときにはわたしは顔を出せそうにないな、と思ってしまった。
なんだか、みんなの顔がちょっとこわかったから……！
休み時間になると、『千明くんのダンスレッスンはいつにするか』という話題でもちきりだった。
「む〜。結愛たちが先にお願いしたのに。ねっ、ひなっち」
「そうだね。さすが千明くんたちだね」
「……そうだけどお〜〜〜!!」
ほっぺを膨らませ、口をとがらせる結愛ちゃんに、わたしはあいまいに返事をした。

千明くん、すごく囲まれてる。
あれじゃきっと、わたしにダンスを教えるところまでは順番は回ってこなそう。
本当に苦手すぎるから、なんとか克服したかったんだけどなあ。
囲まれている千明くんからちょっと距離を置いたところに蒼太くんがいた。
クールに頬杖をついてその様子を見ている。
……かっこよくて運動も勉強もできる蒼太くんにだって、苦手なことがあるとわかったのは少し前のこと。
ホラーゲームが苦手なのをすごく気にしていて、自分のことを「かっこわるい」って言っていたんだ。
でも、わたしからしたら、そんなことで蒼太くんのかっこよさは減らない。
それは周りの人からしたらささやかなことでも、本人だけが気にしすぎてしまうこともあるって気がついた。
わたしがダンスを苦手だと思ったきっかけは、身長が高くて目立ってしまうことを気にしすぎていたせい。

でも、わたしがうまく踊れないのって、練習が足りていないからなんじゃないかな。
なんでもかんでも、うまくいかないことを身長のせいにしちゃってるかも……？
「次の時間は、委員会かあ。ひなっちは園芸委員だったよねえ。楽しー？」
結愛ちゃんに聞かれて、わたしはこの前の水やりのことを思い出す。
さわやかな朝の時間と、これから大きくなる植物たちとのふれあい。
それに委員長の鷹取くんがとってもやさしくて、難しいことをたくさん知っていたんだ。
「……ねえ、結愛ちゃん」
「なあに？」
わたしは声をひそめる。
「リスって急にしっぽを掴まれたら、しっぽだけ残して逃げちゃうんだって」
「ほんとに急に何!?　ひなっち、こわい話しないで!?」
「それに、肉食なんだって。委員長の鷹取くんが、この前教えてくれたの」
「へえええ!?」
わたしがリスの雑学を披露したら、結愛ちゃんは大きな目がこぼれ落ちそうなくらいに

びっくりしていた。
驚いた拍子に、ポニーテールがぽよぽよと上下に揺れる。
毛先がちょっとくるんと丸まっていて、とってもかわいい。
「結愛ちゃんって、髪の毛は自分でやってるの？」
「うん、そうだけど……またこわい話じゃないよねえ？」
さっきの話のせいで、こわい話をするんじゃないかって疑われてる！
あわあわとしながらわたしは思ったことを伝えてみる。
「う、ううん。いっつもかわいいし、素敵だなって思って。結愛ちゃんは器用なんだね、すごいな、やっぱり練習とかするの？」
「ま、まあ……週末に動画とか見ながらやったりとかは……してるけどぉ」
結愛ちゃんはポニーテールの毛先をつかまえて、指先でくるくるといじりだす。
「わたしも前にそういう動画見たけど、言ってる意味がわかんなくて無理だったよ。結愛ちゃん、ほんとにすごいね」
かわいい髪型には興味があるから、動画を検索したことがある。

『誰でも十分でできる！』
『不器用さんにもオススメ☆簡単ヘアアレンジ☆』
誰でも簡単って書いてる動画を漁ってみたんだけど……全然できなかったんだ。
「……ありがと」
結愛ちゃんは少しだけはずかしそうにそう言った。
「なんか思ってた感じと違うけどお、園芸委員、楽しそうでよかったね」
「うん、水やりもすごく楽しかったんだよ！」
あの日のさわやかな朝が頭に浮かんで、わたしは思わず笑顔になる。
結愛ちゃんにそう言ってもらえて、すごく

心がポカポカする！
「……やっぱ、ひなっちって……」
「え、なあに？」
「んーん！　なんでもない。そろそろ移動しよ☆」
結愛ちゃんは何か言いたそうだったけど、話を切り上げて移動を始めた。

☆　☆　☆

「ひなっち、今日も途中まで帰ろうよぉ～！」
「あ、うん……！」
委員会のあと、帰りの会が終わったところで、結愛ちゃんが誘ってくれた。
うれしいのに素直になれなくて、はずかしがっているような返事をしてしまう。
一緒に靴箱へ向かうと、千明くんたちが女の子たちに囲まれているのが見えた。大丈夫かな？

結愛ちゃんはそのグループにまったく興味がないみたいで、さっさと帰ろうとしてる。
いつもは、みんなとワイワイ話してる結愛ちゃんだけど、ふたりきりになると、ちょっとだけ雰囲気が違う気がする。
かわいくて守ってあげたくなるタイプだと思ってたけど、実はわりとサバサバしてるっていうか……！
レンガ模様の通学路を、ふたりでてくてくと並んで歩く。
足元を見て歩いていたら、小さなピンクのお花が咲いていて、見つけただけでうれしくなっちゃう！
「てゆーか、みんなして千明くんに群がっちゃってさぁ～。あの子たちみんな、自分でちゃんと踊れてたよねえ、普通に」
学校からちょっと離れたところで、結愛ちゃんは大きくため息をつく。
みんなが千明くんに集まってるのは気にしてないと思ってたけど、そうじゃなかったみたい。
「そうだったの、かな。わたし、自分のことでいっぱいいっぱいでわからなくって」

わたしは体育の時間のことを思い返してみる。
……周りを見た記憶が全然ない。
先生の動きと、手と足と、もう混乱しながらやってたもん……
「や、まあ、たしかにひなっちはできてなかったけどお」
「うっ、そうだよね」
結愛ちゃんの言葉が、グサッとささる。
やっぱり、わたしの身長が大きいから目立っちゃうのかな。
しょんぼりしながらランドセルの肩紐を掴むわたしに、結愛ちゃんは「ねぇ！」と声をかける。
「……結愛、ダンススクールに通ってるからわかるんだけど、ああいうときってはずかしがってモジモジしてるほうが逆に目立つと思うんだあ～」
「えっ、そうなの……？」
結愛ちゃんの言葉に目を丸くする。
「ダンスって表情も大事なんだよねえ。運動会のやつとかはテンション高い曲だから、にこにこ笑顔で踊ったらいいよぉ」
「じゃあわたし、今のままでも目立ってる？」
「うん、わりと」
結愛ちゃんはキッパリとうなずく。
そうだったのか。
縮こまっていたら目立たないと思っていたけど、モジモジしてたら、余計にダメだったみたい。あれ、でも……
「結愛ちゃん、ダンススクールに通ってるなら、もう上手なんじゃ……？」
わたしはハッと気がついた。
ダンススクールに行ってるなら、千明くんのレッスンはいらない気がする。
わたしの言葉に、結愛ちゃんはぎくっと肩を揺らした。
「あっ！　あはは、お姉ちゃんの話だよ！　ダンススクールに通ってる、お姉ちゃんから聞いた話だってばあ～！」
結愛ちゃんはそう言い切って、アハハと笑う。

「そ、それにしても、今日は暑いよねえ!!」
結愛ちゃんの真似をして、わたしも空を見上げる。
カレンダーの上ではまだ春なのに、照りつける日差しがジリジリと暑い。
腕や足をトゲでチクチクとさされているみたい。
地球温暖化っていわれているけど、毎年春が夏みたいになっているよね。
半袖でちょうどいいくらいなんだもん。
「運動会はそんなに暑くないといいんだけどお。結愛、絶対に日焼けしたくないしっ！
白い肌をキープしてるのにっ」
「うん、日焼けしたらヒリヒリもするよね」
結愛ちゃんの力強い言葉に、わたしは強くうなずく。
赤くなると、しばらく痛いし、熱っぽくなっちゃうから。
ふたりで話していたら、あっという間に横断歩道の前まで来ちゃった。
「あ。ここまでだねえ。じゃあバイバイ、ひなっち～」
「うん、また明日ね！」

わたしは結愛ちゃんに手を振って、家を目指す。
――そういえば……！
もう少しでマンションにつくところで、ふと気がついた。
結愛ちゃんと話している間、身長のこと考えなかった……！
前は、結愛ちゃんみたいにかわいい大きさになりたい、とか。
結愛ちゃんみたいにかわいいお洋服が着たい、とか。
わたしの中は、人をうらやましがる気持ちでいっぱいだったのに。
もちろん今もその気持ちはあるけど、それだけで頭がいっぱいにならなくなってる。
どうしてだろう……？
なんだかうれしい気持ちになって、わたしは思わずスキップをしたくなった。
「……でも、それはそれとして、ダンスをがんばらないといけなかったんだ」
浮かれていた心が一気にズドンと重くなった。一瞬だけ跳んだスキップの足を止める。
結愛ちゃんとの話で、わたしは知ってしまったんだ。
どうせ目立ってしまうんだったら、もう隠れるんじゃなくて、堂々と踊りたい！

そう決めたわたしは、家へダッシュする。
帰ったらさっそく、動画をチェックしてダンスの練習をしよう。
運動会のときには、お母さんは帰ってくるし、お父さんももしかしたら来られるかもしれないって言ってたんだ。
その姿を見てもらうためにも、もっと上手になりたいな。

第二章　秘密の特訓スタート！

「……えーと、左右にステップしながら、両手をクロスしたり開いたり……って、あれ？」
タブレットのダンス動画を見ながら練習を始めたわたしは、すぐに自分の不器用さに気づいてしまった。
――右足、左足……どっちが先だったっけ？
両手をクロスするタイミングは？
動画の女の子は軽やかに踊っているけど、わたしの動きはもっさりしていて、リズム感がまったくないよ……！
音楽に合わせて踊ろうとすると、テンポが合わなくて、足がもつれそうになる。
何度も同じステップを繰り返すうちに、汗が噴き出して息も荒くなってきた。
姿見に映る自分の姿はぎこちなく、情けなくて、涙がこぼれそうになる。

「こんなの、みんなに笑われちゃいそう……」
不安がわたしの心を締めつける。
みんなより高い身長、モタモタした動き……みんなはわたしをどう見ているんだろう？
「あの子、全然踊れないね」とか「見てられない」なんて言われてるんじゃないかな？
ダンスが上手な結愛ちゃんや千明くん、それに蒼太くん。
彼らの視線が、ひどく気になって仕方がない。
お母さんたちも見にきてくれるのに、失敗したらがっかりされちゃう。
そんな気持ちに押しつぶされそうになりながら、それでも、わたしは小さくこぶしを握った。
ここで諦めたら、ずっとこの不安と付き合っていかなきゃいけない。
「落ち着いて、もう一回」
深呼吸をして、気持ちを落ち着かせる。
さっきの結愛ちゃんの言葉を思い出す。
『はずかしがってモジモジしてるほうが、逆に目立つから』って言っていた。

そうだ、縮こまっていると余計にぎこちなく見えるんだ。
だったら、堂々と踊ろう！
たとえ失敗しても、精一杯がんばった自分を、まずは自分で褒めてあげよう。
「ええ……ここでターン、ひゃっ！」
気合を入れてターンしたら、足がもつれて転んでしまった。
これは、相当練習しなくちゃ……
床でよつんばいになりながらそう思った瞬間、部屋の扉がノックされた。
「……ひな、いる？　なんかすごい音したけど大丈夫？」
蒼太くんの声だ。わたしはあわてて立ち上がる。
みんなと練習することになっただろうから、遅いと思ってたのに！
「うん、いるよ！　全然、転んだりとかしてない！」
その声に、なぜだかさっきまでの不安が消え去って、わたしは急いでドアを開ける。すると、ちょっと驚いた顔をした蒼太くんが。
「……ダンスの練習、してたんだな」

うしろのタブレットから、運動会のダンス用の音楽が流れてる。バレバレじゃん！
それにこの感じだと、ダンスに失敗して転んだことも見透かされてそうだ。
「そ、そうなの。でも全然上手にできなくて。蒼太くん、どうかした？」
わたしはごまかすように笑顔をつくる。
運動会まではあと三週間ある。それまでにあの絶望的なダンスをなんとかしなきゃ。
「今から時間ある？」
蒼太くんに聞かれて、わたしはドキッとしてしまった。
なんだろう、何かに誘ってくれるのかな。
「これから千明の家に行くことになったから、ひなもどうかなと思って」
「千明くんの、おうち!?」
「ダンスの練習するから来ないかって。……どうする？」
「えっと……もしかして、みんなもいるのかな」
本当は教えてもらいたいけど、放課後、あれだけの女の子たちに囲まれていた千明くん。
みんなに見られながらやるくらいなら、家で練習するほうがマシかなあ。

でも、全然コツがわからないから、鏡の前で練習してもうまくなる気がしない。
「誘われてんのはおれとひなだけだから安心して。ひながあまりにも不安そうでプルプルしてたから、教えてやりたいんだって」
どう答えようかと悩んでいたら、蒼太くんはそう教えてくれた。
プルプルって、わたし、千明くんからはそんなふうに見えてたの!?
あれ、蒼太くん、なんか笑ってない……？

「……なんで笑ってるの？」
「ふ、いや……捨てられた子犬みたいにプルプルしてたなって、思って……クク」
「蒼太くんも見てたの!?」
蒼太くんの言葉にわたしは顔が一気に赤くなった。
ダンスの授業で戸惑っていたところ、しっかり見られてたんだ……！
はずかしすぎる！
ああもう、穴があったら入りたいよ。
わたしがショックを受けている横で、蒼太くんはまだ笑っている。
「や、でも、かわいかっ……ゴホッ、ゴホッ!!」
「蒼太くん、大丈夫!?」
笑ったからなのか、蒼太くんは急にせき込んでしゃがんでしまった。
お母さんがしてくれるみたいにあわてて背中をさすったら、せきは落ち着いたみたい。
「……どうする？　千明の家、ここからわりと近いから五分もあればつくけど」
「ぜひ、お願いします……！」

千明くんと蒼太くんに心配されるほどのわたしのプルプルダンス。
身長が高いとか、そういうレベルじゃなかったんだ……？
そうしてわたしは、冷静さを取り戻した蒼太くんと一緒に千明くんの家に行くことに。
心臓はまだ少しドキドキしているけど、さっきまでの不安とは違って少しワクワク。

「やあ、いらっしゃい～」
千明くんのおうちについたんだけど、すごく広くてびっくり。
お母さんがヨガの先生で、スタジオまであるんだって。スゴすぎる！
今日はそのスタジオを使っていいらしい。
そして、蒼太くんが言ってたとおり、ほかには誰もいなかった。
「千明くん、みんなは大丈夫なの？」
わたしはそう尋ねる。
放課後の様子を知っているから、やっぱり気になっちゃう。
「うん。みんなとは、これから昼休みに練習しようって話になったから大丈夫だよ」

「そ、そうなんだ……！」
千明くんは、白い歯を見せて大きく笑った。
その笑顔はまるで太陽みたいにまぶしくて、絵本の中に出てくる王子様みたい。
わたしは思わず、顔が熱くなって、視線をそらしてしまった。
い、イケメンさんの笑顔は刺激が強すぎるよ〜〜〜！
「じゃ、さっそくやってみようか。ひなちゃんはどこが苦手？」
笑顔を切り替えた千明くん。
わたしは今日おさらいしたところを思い出して、ちょっと戸惑いながら答えた。
「あっ、えーっと、全部、かな……？」
むしろ得意なところなんて、悲しいことにひとつもないんだよなあ。
そう思っていると、隣から蒼太くんが口を出す。
「ひなは、ターンのところで足がもつれてた」
「蒼太くん!!　なんで知ってるの!?」
それはまさにさっきのことだよね!?

千明くんに告げ口をすると、蒼太くんはベッと舌を出していたずらっぽく笑った。
それからスタジオの端のほうに座って、ゲームをし始める。
えっ、蒼太くんはやらないの……!?
わたしがふたりを見比べてたら、千明くんがクスッと笑った。
「ああ。蒼太は見守りだよ。ひなちゃんがひとりでぼくの家に来るのは難しいだろうからって」
「そうなんだ……！」
「まあある意味、見張りでもあるかもしれないね」
「見張り……？」
見張りって、なんだろう。
わたしがサボらないようにって、ことかな？
首をかしげていたら、千明くんはやさしい笑顔のまま屈伸運動を始める。
「フフっ。さあやろうか。苦手なところが全部なら、ひとつずつ動きを分解してがんばろうね。基本ステップを覚えたら、わりと簡単だから」

「よろしくお願いします……！」
「まずはストレッチから。体の準備をしっかりしていこう」
「はい！」
よし、がんばるぞ……！
こうして、千明くんとわたしと蒼太くんの秘密の特訓が開始した。
「……ひなちゃん、リズムをよく聞いてね」
だんだん曲についていけなくなっていることを、すっかり見抜かれてしまっている。
「ここでボックスステップ。これは型どおりのステップだから、まずはスムーズにこの足運びができるように練習しよう」
「う、うん。わかった」
「ボックスステップは、まず床に想像で四角形を描くんだよ。そして、その四つの角を左右の足で交互に踏んで……」
千明くんは言いながらステップを踏んだ。軽やかで、音楽が聞こえてきそう。
このステップ、去年のダンスでもあったけど、バタバタとやっちゃって身についてない。

「次はひなちゃんね。はい、どうぞ」
千明くんに言われて、わたしは床に四角形を想像してみる。
えっと、まずは右足を左上の角。
次は左足を右……かな？
「えと、次は……？」
体を変にひねったまま、どっちに動けばいいのかわからなくなっちゃった！
「ひなちゃん、次は右足を左足があるところから、まっすぐ線を引いた場所に下ろしてみて」
千明くんがわたしのすぐうしろに立って、わたしの動きを直してくれる。
「もっとこうやって、足を踏み込んでみて。背中はまっすぐね」
「は、はい……！」
わたしの背中に手を添えながら、やさしく教えてくれてるんだけど……千明くんの温かい手の感触で、心臓がバクバクし始めた。
それに、千明くんの顔もすごく近くて……ドキドキしちゃうよ……！

それに、お花のいいにおいがする。
混乱しすぎて、ステップはぐちゃぐちゃだ。
さすがの千明くんも困った顔をしている。
「これは……教えがいがありそうだね」
さっきまでのやさしい笑顔は消えて、千明くんは真剣な表情に。
明らかに目の色が変わった、よね？

——そして、練習開始から約一時間。
「じゃあひなちゃん。毎日ストレッチとステップの練習は欠かさずにがんばってね」
「はい……」
踊りっぱなしでヘロヘロになったわたしは、蒼太くんと一緒に家に帰った。
千明くんのレッスン、案外スパルタだった……！
それにしても。
千明くんが一回通しで踊ってくれたんだけど、やっぱりとっても上手だった。

ダイナミックな動きに、キレッキレのパフォーマンス。つい見とれちゃった。
それに、ずっとゲームをしてたはずの蒼太くんも、最後のほうは一緒にダンスをしてくれたんだけど……もうフリが頭に入ってたの！
千明くんと並んで踊っているのを見てたら、本当にアイドルみたいだった。
「……はあ。みんないろいろできてすごいね」
わたしの口からは言葉がポツリとこぼれた。
見上げた夕焼け空には、カラスが一羽飛んでいる。
遠くで鳴き声が聞こえて、なんかさびしい感じ。
「千明くんも蒼太くんも、紫音くんもだし、結愛ちゃんも……それにカネちさんも鷹取くんも。みんなすごいよね。尊敬しちゃうなあ」
わたしの周りには、すごい人がいっぱいいるんだ。
「……おれは、ひなもすごいと思うけど」
「えっ？」
「そうやって周りのこと素直に褒めるし、誰の悪口も言わないだろ」

蒼太くんが真剣な顔で見つめてくる。
そんなこと考えたこともなかった。
「そういうのも、おれはすごいと思う」
「あ、ありがとう……！」
お互いちょっとだけうつむいて、言葉少なにマンションへ急いだ。
ほっぺが熱い。
まさか蒼太くんに面と向かって褒めてもらえると思わなかったから、ずっとニヤけてしまうよ。
蒼太くんがこっち向いてなくて、本当によかった！
そのままマンションのエレベーターに乗り込んで、わたしはハッと思い出した。
「あっ、そういえば……！」
わたし、前に蒼太くんから聞かれたことにまだ答えてなかったんだ！
似た状況になって、急に思い出しちゃった！
ちらっと蒼太くんのほうを見ると、ボタンを操作しているところ。

「あ、あの、蒼太くん」
今あるだけの勇気をかき集めて、蒼太くんに声をかける。
緊張して顔は見られないけど、「何？」といういつもの落ち着いた声色が聞こえた。
「前に聞かれた身長のことなんだけど……じっ、実は百六十センチもあるのっっ！」
思い切りすぎて、エレベーターの室内に大声がこだまする。
今さらこの前の話をされても、蒼太くんだってきっと困っちゃうよね。
それでも、ちゃんと言えた。
胸のつかえが取れた感じがする。
わたしは階数表示を見つめる。ぐんぐんとエレベーターは上階へ。もう少しでフロアについちゃう。
「おれの身長は百五十三センチ。あと七センチか。来年には追いつけそうだな」
茶化さず、蒼太くんは真剣な顔でうなずく。その顔はどこかうれしそうで、わたしは不思議な気持ちになった。
「で、でも、来年になったらわたしもまた大きくなってるかも……だよ……？」

「おれがそれよりも伸びたらいいだろ。兄ちゃんだって小六のときに伸びたって言ってたし。見てろよ、ひな。来年はおれが抜くからな」
「蒼太くん……へへ」
蒼太くんは挑戦的な顔をしている。
ポーンという音がして、エレベーターが開く。
身長の話。前はあんなにイヤだと思っていたのに、蒼太くんが明るくそう言ってくれただけで、楽になった気がする！
クラスの誰よりも身長が高いのは、わたしが思っているより、みんなはそんなに気にしていないのかもしれない。
玄関について、蒼太くんが口を開く。
「千明の家でダンス練習やるとき、また行く？」
「あ……！　うん、ぜひ、お願いしたいです！」
千明くんのレッスンは厳しかったけど、同時にすごく楽しかった。
わたしは千明くんの指導を胸に、もっと練習をがんばろうと思ったんだ。

そして、いつか千明くんみたいに、かっこよく踊れるようになりたい！
「わかった、また誘うな」
目を細める蒼太くんは、いつもよりずっとやさしい顔をしていて。
わたしは胸がドキドキと高鳴るのを感じたの。

第三章　手紙

千明くんにこっそりダンスを教えてもらうようになって、もう一週間。
その間、蒼太くんたちとゲームをしたり委員会活動をしたり。
わたし、なんだかとっても楽しい毎日を送ってる！
これからお母さんたちとテレビ電話で話すの。毎晩そうしてるんだ。
いつも「ひな、元気そうでよかったね！」って笑ってくれる。
八時になったのを確認したわたしは、タブレットをベッドにセットした。そして、通話のアプリを開く。
《ひなちゃん。こんばんは！》
まず映ったのはお母さん。そのうしろには、ギプスをして椅子に座ったお父さん。
《ひな。今日も楽しかったか？》

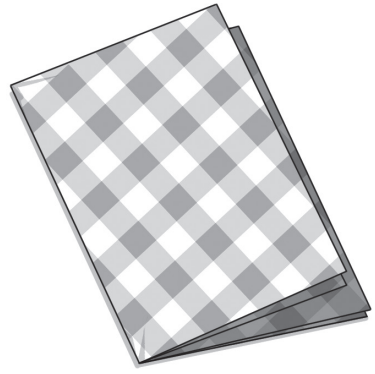
ふたりの声は、いつもどおり、とってもやさしい。
怪我の調子もいいみたいで、もう退院して、今は在宅勤務をしながら、ゆっくりしているんだって。
運動会の前日に、こっちに帰ってくることも決まってる。
「お父さん、わたし今、ダンスの練習をがんばってるよ」
わたしは得意げにそう言った。
練習をすることで、苦手意識も少しずつ薄れているような気がするの。
逃げていたころには、全然気がつかなかった感覚。
どんどん新しい自分に会えている気がして、とっても楽しいんだ。
レッスンのときにも千明くんと蒼太くんに褒められたし！
《おお、そうか！　運動会が楽しみだなあ》
画面の向こうのお父さんは、目尻を下げてうれしそう。
お母さんはどうしてだか、目元をぐいっと手の甲でぬぐっている。
《ひなちゃん、がんばってて偉いね。お母さんももうすぐ帰れるからね》

「えへへ、わたしも、お母さんとお父さんに会いたいな！」
そうやって、お父さんとお母さんと話していると、わたしの心もポカポカしてくるんだ。
「よし、もっとがんばろう！」って、いつも思える。
気合がまたたくさん入ったわたしは、ウキウキした気持ちで次の日を迎えた。

☆　☆　☆

五時間目の体育の授業は、ダンスの全体練習！
自主練もがんばったおかげで、ちょっとずつダンスが上手になってきた気がする！
ちょっと前はできなかった難しい動きもできるようになって、うれしくて、無理に体を縮めようとしなくなった。
結愛ちゃんはわたしのダンスがうまくなったことに気づいて、びっくりした顔をしてたけど、自主練をがんばってるって話したよ。
それに、千明くんがお昼休みにみんなにレッスンをしている効果かな？

うちのクラス、ダンスがすごく上手になって、先生もびっくりしてた！
やっぱり、千明くんはすごい！
放課後、やっと帰れる時間になって、わたしは靴箱に急いで行く。
今日は、また千明くんの家でダンスのレッスンがある日だから！
「……あれ？」
靴箱から靴を取り出そうとしたら、何かがはらはらと木の葉みたいに落ちた。
わたしの靴箱からだったよね……？
不思議に思いながら、わたしはその紙を拾った。
——なんだろう、手紙みたいだけど。
カサカサとその紙を広げたとき、わたしは一瞬息が止まってしまった。
「ひっ……」



ピンクの手紙には、こんな言葉が書かれていた。
《デカ女！》
《でかすぎてダンスの邪魔》
《蒼太くんと千明くんに近づくな》
《鏡を見てくださ〜い》
悪意のある言葉がたくさん。
心臓がバクバクと騒ぎ出す。
あわてて周囲を見渡したけど、誰もいない。
何、これ……！
「ひなっち〜!!　ボーッとして、どうかしたあ〜？」
「わっ！」
気づいたら、近くに結愛ちゃんが来てた。
「そんなにびっくりしなくても……早く帰ろ〜。運動会の練習で疲れたよぉ」
約束はしてなかったのに、結愛ちゃんの中ではふたりで帰ることになっているみたい。

うれしいのに、今は落ち着かない気持ちでいっぱいだ。
「ご、ごめんねっ」
わたしは急いでその手紙をポケットに隠して靴を履いた。
頭の中が真っ白。
心臓がドキドキ、ドキドキ……
歩き出して校門を出ても、そわそわした気持ちは変わらない。
ただ足をロボットみたいに前に動かして、なんとか進んでいるみたい。
「ひなっち、なんか顔色悪いよぉ？　だいじょぶ？」
「だ、大丈夫」
ふいに、結愛ちゃんに顔をのぞきこまれる。
いつの間にか猫背になって、うつむいてしまっていた。
「じゃあいいけど。あ〜でも本当に、千明くんたちに群がってるみんな、なんなのかなあ？」
「……うん」

「ひなっちもそう思うっ!?　なんかムダにベタベタ触っちゃったりしてさぁ！　ついでに蒼太くんにまでめちゃくちゃ話しかけてるしい〜っ」
「……うん」
「結愛たちのグループが最強なのにっ！　ほんとグループ活動がんばろうねっ」
「……うん」
結愛ちゃんの言葉がテレビの音みたいに流れていく。
みんなと過ごすうちに、少しずつ元気になってきた気持ちが、あの手紙で全部ダメになっちゃったみたい。
やっと、自分のことが少しだけ好きになれた気がしてたのに……
……また、背中を丸めてしまう。
「やっぱチョーシ悪いよね、ひなっち」
「あ、ご、ごめん……！」
わたしが全然話を聞いてなかったことに、結愛ちゃんはきっと怒っちゃった。
腰に手を当てて、こっちを見ている結愛ちゃん。

ムッとしたようなその顔も、すごくかわいい。
きっと結愛ちゃんなら、あんな手紙をもらうことなんてない。
「ね、ひなっち〜！　今日ゼッタイなんかあったでしょ！　どうしたの？　体育の時間まではは絶好調だったじゃん！」
「な、なんでもないんだよ、本当に」
「なんでもなくないしっ！　言ってよ！」
「……結愛ちゃんには、関係ないから」
「……っ」
ハッとして顔を上げたけど、もう遅かった。
結愛ちゃんは、すごく悲しい顔をしてる。
「わかった、もう聞かない！　バイバイ！」
「あっ……！」
結愛ちゃんは、青信号になったのを確認して、横断歩道を猛スピードで走って行ってしまった。

立ち読みサンプル
はここまで

……もう、見えなくなっちゃった。
「結愛ちゃん……」
わたしは結愛ちゃんが走って行ったほうを見て、小さくつぶやく。
完全に八つ当たりだ。
結愛ちゃんは何も悪くないのに。
わたしのことを心配してくれていたのに、何も言えなかったんだ。
目の前から知らないカップルが歩いてきて、わたしはぶつからないようにサッと避ける。
「……えー、今の小学生？」
「ランドセルあるからそうでしょ」
「いや、デカくない？　ふつーに。お前よりデカいじゃん」
「ランドセルが浮いてるよね、はは」
運が悪いことに、わたしの耳はそんな会話をしっかりと拾ってしまった。
最近はずっとやさしい人たちに囲まれていたから忘れていたんだ。
そうだ。身長が大きいのにランドセルを背負っているわたしは、みんなとはちょっと違